

地域情報（県別）

【愛知】ホスピタルラジオ開局で「音声広報のメリット実感」-鈴木朝子・藤田医科大学病院看護部科長らに聞く◆Vol.2

2020年2月28日（金）配信 m3.com地域版

2019年12月に日本初の「ホスピタルラジオ」を開局した藤田医科大学病院。今まではテキスト情報だけで病院を広報していたというが、現場では既に音声情報ならではの魅力やメリットを感じているという。少しずつだが、患者からの反響も届きだした。今後は学生ボランティアにも運営に協力してもらう予定で、将来的には患者や地域住民が参加する企画も立てたいという。開局に携わった看護部科長の鈴木朝子氏と事務部主任の辻祐介氏に聞いた。（2020年1月21日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

——前回の記事で番組「フジタイム」の概要についてお聞きしましたが、もう少し詳しく教えていただけますか。

鈴木 1月6日に放送を開始した第2回のものでご紹介します。MCは私と男性看護師、広報部の女性の3人で、放送時間は38分でした。番組の構成としては、冒頭の5分で年始の挨拶や正月の過ごし方をMCの各々がざっくばらんに話し、続いて当院の医療を紹介する「医療フロンティア」のコーナーで湯澤由紀夫院長に登場していただきました。こちらのコーナーでは今回、すい臓がんの早期発見を目指そうと超音波内視鏡を導入したことや、乳がんの治療に関して技術の優れた先生に加入していただいたことを5分ほど語っていただきました。残りの時間は昨年12月21日に院内で開いたコンサートの演奏を流しました。



鈴木朝子科長（左）と辻祐介主任

——私も第2回の放送を聞きましたが、医療に関する情報は文章を読むよりも音声を聞く方が頭に残りやすいかもしれないと思いました。番組冒頭の雑談の中にもさりげなく病院の情報を盛り込んでいるように思ったのですが、これは意図されていますか？

鈴木 はい。当院のことを少しでも患者さんに知っていただきたいので、雑談でありながらも病院にまつわることを知ってもらえるようにしたいと思いました。それで、私が母の趣味であるリース作りのために木の実を拾い集めていることに絡めて、当院のシンボルツリーであるメタセコイア（アケボノスギ）を紹介しました。

MCをするのは初めてでやはり緊張しますが、番組を聞いてくれる患者さんに何をどう伝えればいいのかを考えるのはいい機会ですね。話す言葉一つひとつを考え、選んでいく作業は、患者さんとの普段の触れ合いにも生きるかもしれません。

——開局間もないですが、患者さんから何か感想は寄せられましたか？

鈴木 まだ少数ですが寄せられました。「いい試み。病院の人からいろんな話を聞きたい」「HCUに入っていたので病院のコンサートに行けなかった。ラジオを通して後で当日の演奏を聴けたのはうれしかった」という声が聞かれました。また、リスナーさんではありませんが、マスコミに取り上げられた記事を読んだ徳島県在住の方から「医療者と患者をつなぐのはとても大切なことなので頑張ってください」と励ましのお手紙もいただきました。

実は、QRコードの載ったチラシに放送内容を掲載するようにしたのも「回ごとの内容が分かるといい」という患者さんからのアドバイスがあったからです。院内に置いているご意見箱に投函していただくなどして、今後もフジタイムに関するご意見やご希望を広く集めたいと考えています。

——開局を発案したのは湯澤院長とのことですが、準備の段階から中軸を担っていたお2人はこの取り組みをどうとらえ、動いてきたのでしょうか。

鈴木 患者さんが当院をより近い存在に感じられるきっかけになればいいなと思います。治療は患者さんの協力がなければ上手く進まないこともありますから、患者さんと医療者の信頼関係は重要です。その一方で、患者さんはともすれば「こんなことを言うと先生に嫌われちゃうんじゃないか」などと遠慮してしまうことがあるのも実際のところ。もちろん、そこは医療者と患者さんが直接お話を重ねていくのが望ましいわけですが、ホスピタルラジオにも医療者と患者さんの距離を縮められる可能性があると思います。

辻 「今まで院長の話を聞く機会がなかったから良かった」とメディアの取材にホスピタルラジオの感想を話していた患者さんもいましたから、やはり普段は接しない医療者を知られたり、その人の声を聞けるのはいいことだと思います。

当院は今までホームページや冊子を介して患者さんに広報していましたが、これはいずれもテキスト情報であり、音声で病院のことを伝えるのは初めてです。音声だと患者さんは寝たままでも情報を得られますし、目の不自由な方にも有用です。親近感が湧きやすいのもメリットの一つだと言えます。



過去に行われた収録の様子（同院提供）

——なぜ、日本初の取り組みを行った、行えたのが同院だったのか。病院のマインドも関わるのでしょうか。

鈴木 いろいろなことに挑戦したり、新しいことをスピーディーに取り入れたりする風土があるのかもしれませんが。藤田医科大学などを運営する学校法人藤田学園の星長清隆理事長がそんなマインドの方だということも影響しているのではないのでしょうか。

学校法人としては、2013年に訪問看護や訪問リハビリテーションなどを行う地域包括ケアシステムの事業所「地域包括ケア中核センター」を国内で初めて学内に開設したほか、同センターのサテライトとして「ふじたまちかど保健室」を近くの豊明団地に作り、そこで看護師や理学療法士などによる講座や各種イベントを開催、団地の一部をリノベーションして学生に入居してもらい、住民との交流も促しています。

一方の病院では2009年に手術支援ロボット「ダビンチ」を国内でいち早く導入し、2017年には国内で初めてトレーニング施設としてアメリカの開発メーカーに認定されました。現在、ダビンチを活用した手術件数は国内トップクラスです。

——なるほど、病院のマインドも関わるかもと。最後に、フジタイムの今後の展開をお聞かせください。

辻 直近では10分から20分の短い物語の朗読を院内ボランティアさんにやっていただく予定です。作品は著作権が切れたものを公開しているネット図書館「青空文庫」からピックアップしようと考えています。あとは患者さんの困っていることなどを聞いてそれに答えるといったQ&A形式のコーナーもやっていきたいですね。将来的には、患者さんや地域住民の方々が参加するような企画も立てられれば。

鈴木 患者さんやご家族の思い出の曲を流すコーナーもあるといいのではないのでしょうか。ただ、プロの楽曲を流すのは権利が関わるので、これに関しては辻さんが関係者に確認をとっているところです。

あとは周辺にある医療系の大学や短大、専門学校生徒さんにも参加していただきたいと考えています。現在、ボランティアを募集していて、先ほども話したようにMCの仕事は患者さんにどんな言葉をどんな表現で伝えるべきかと考えるいい機会になるので、学生さんの将来にも生きるかもしれません。

——テキストだけではなく、動画や音声でどう情報を届けていくか。これは医療業界も考えた方がいいテーマだと思います。藤田医科大学病院の取り組みはその先事例になるかもしれないですね。ありがとうございました。

◆鈴木 朝子（すずき・あさこ）氏

藤田医科大学病院看護部看護科長。総合救命救急センター副センター長。

◆辻 祐介（つじ・ゆうすけ）氏

藤田医科大学病院事務部総務室総務課主任。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

